

知ろう! 仏教讃歌

(2)

山口 篤子

《宗祖降誕会》

詞・鈴木行三

曲・野村成仁

新しい文化の交差点で生まれた歌

当時の日本では、誕生日を祝うということは、今日ほどなじみの深い習慣ではありませんでした。しかし、お釈迦さまの誕生日である灌仏会（花まつり）と同じく、宗祖降誕会も多くの人がひとがお参りする恒例のおつとめとして定着します。

その流れのなかで、仏教讃歌《宗祖降誕会》は、大正期に発表されました。本紙前号で

広まった「讃仏歌」のひとつです。「闇に迷うわれひとの」と始まる歌詞は、『御伝鈔』第8段の終わりの部分を踏まえたもので、親鸞聖人の「誕生を讃えまつれ／祝いまつれ」と結びます。以来、この作品は宗祖降誕会には欠かせない曲として、約100年もの間歌い継がれてきました。「誕生を祝う」という新しい習慣と、「讃仏歌」という新しい文化の交差点で生まれた《宗祖降誕会》は、変わりゆく時代のなかで、降誕会をつとめてきた人びとの思いを今日へ脈々と伝えていくのです。

（本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室研究員）

親鸞聖人のご誕生をお祝いする宗祖降誕会。本願寺では5月21日（旧暦4月1日）をお誕生日とし、前日から法要や祝賀行事が行われます。なかでも宗門校の生徒・学生が参拝する音楽法要は、仏教讃歌《宗祖降誕会》の斉唱で締めくくられます。

現在のような本願寺での宗祖降誕会は、日本の近代化と歩みを同じくして、宗門改革を進めた第21代明如上人が、宗祖の誕生日を新暦に改め、明治7（1

874）年5月21日に法要を営まれたのが最初といわれています。

江戸後期にご誕生の地・日野に創建されたお堂（現在の日野誕生院）で法要が行われていましたが、幕末・維新期に途絶えてしまいました。そこで、明治の初めに行われた海外視察の報告などを参考に、宗祖の誕生日に本願寺で法要をつとめるよう位置付けられたのではないのでしょうか。



宗祖降誕会に参拝する宗門校の生徒・学生。高校生代表者による「讃歌衆」を中心とした歌声が響く



収録CD：『仏教讃歌一歌集』
収録楽譜：『仏教讃歌一歌集』
（本願寺出版社刊）

※スマートフォン、タブレットなどで上記QRコードを読み込むと掲載曲を聴くことができます。ご加入のプランなどに注意してご利用ください